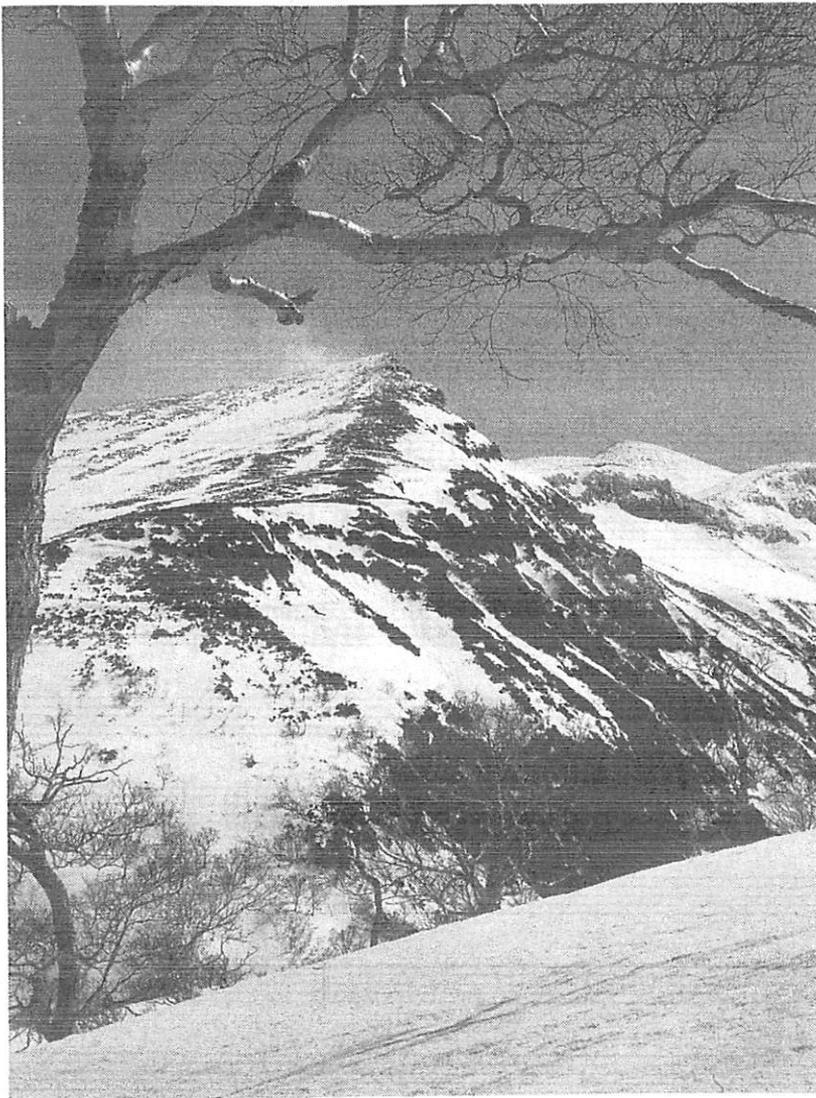


北の自然

北海道自然保護連合通信

No.50 1992. 6

北の森を守る全道交流集会から
全道リゾート開発構想
会の活動報告



早春の十勝岳(三段山より)
撮影 寺島一男

「水豊かに」

関山 昭子 詩
平佐 修 曲

♩ = 68-72 *mp* *dol* C G7 C G7 C

ひ - ろ ひ - ろ と み - す ゆたかに みすか

F C G7 C C7 *f*

たかに ひろがる いしかり ていちた い びんが

F Em Dm C C7

わは ははなまわ だいちより わきうまれ だいち
は いねががわ みづから うちまより びんが

F *dol* Em D7 *rall* G *mp* *atempo*

より わきうまれ うたな いこにそそぐ このう
から うちまより あめは ゆうすいさとなる このう

C C7 F Fm C/G G7 1. C

つくしい しつけんは すべて の いのちのむの
つくしい みのは は われらの いのちのむの

2. C *mf* C7 F C

のかわは いのち つなぎながれてきた -

G7 C

かわは いのち つなぎながれてきた -

F C

-

「北の森を守る全道交流集会」 開催報告



去る3月15日、当連合主催の「北の森を守る全道交流集会」を札幌市民会館で開きました。プログラムは第1部が石城謙吉先生（北海道大学苫小牧地方演習林長）講演、第2部が活動報告・意見交換ということが進められました。

石城謙吉先生の 講演（要約）

1、北海道の自然の生い立ち

北海道はもともと二つの島だったものが地殻変動によって新生代第3紀に衝突して一つの島になったと言われる。その時代は今より暖かく亜熱帯の植物が繁っていて、接近した二つの陸塊の間にまず大平原ができた。陸塊が更に近づいて大平原を押しつぶしたところが盛り上がり、そこが日高山脈になった。夕張の石炭などは大平原の森林の遺物である。そのあとに氷河期が訪れ、四回の氷期があり最後のウルム氷期のあとの現在を後氷期と呼んでいる。氷河時代の地表の凍結と溶解の繰り返しによって、丁度霜柱が土や石などを持ち上げるように地表に岩石の堆積と、崩落現象起こり、山が崩れ今の北海道の特徴的ななだらかな地形が形成された。しかし後氷期には氷河時代の永久凍結が溶け、日本海の暖流が盛んになりたくさん雨を降らすようになった。雨は土にしみ込み、川の流量が増え、まばらだった植物は繁茂し北海道全体が森林で覆われた。更に腐食した植物が堆積し土壌が地表にできてきた。

スポンジ状の土壌は雨をよく吸い森を育み、こうして水と土、それと植物が互いに育て合う関係ができ、地表の動きが安定し、自然に恵まれた時代がこの後氷期で、現在に至っている。

2、北海道の気候・自然の特色

北海道は緯度の割に冬の寒さが厳しい。一方夏は暑く寒暖の差が大きい。また冬は雪、夏は雨で降雨量が多い。さらに北にはサハリン、南には本州があり、北方の生物と南方の生物が北海道に渡ってきた。北海道は気候も生物層も多様で豊かな島である。

3、自然と人間の歴史

氷河時代の旧石器文化の時代から人はこの島に住んでいた痕跡が見られる。後氷期に入って八千年位前の地層からは新石器時代の縄文文化の遺跡が出てくる。人間の直立歩行は二百万年前から始まっていたが、世界的に見て、氷河時代が終って温暖になると、古代文明など人の文明が一気に開花した。しかしそういう中で地球上の環境問題も始まっている。例えば中国では華北における森林破壊によって国土が荒廃し、文明の拠点は華中、華南へと移っている。

狩猟文化の場合はこのような自然破壊



カンボク(スイカズラ科)



はあまり起きなかった。農耕文化が自然を刈り取る文化とすれば、狩猟文化はつみ取る文化である。北海道は農耕文化が明治まで入ってこなかったため、それまではアイヌ文化の土地だった。ところが、和人が貨幣経済を持ち込んだことにより状況が一気に変わった。例えばアイヌはシカを食べる分だけ捕った。しかし和人は金を得るために捕れるだけ全部捕ろうとした。こうして資源の収奪が始まった。

4、自然の収奪

そうなるといういろいろなことが起きてくる。人口が爆発的に増加し、農耕地化が急激に進んだ。道路と鉄道の発達がそれらを促した。明治以前の交易路はほとんど船を使っていたのだが、明治六年に着手した函館―札幌を結ぶ道路に始まり、大正末までに四万キロもの陸路が、囚人労働とタコ部屋労働によって一気に造られていった。鉄道建設も明治に始まり大正末には現在の状態までほぼできてしまった。わずか六十年間で原始の島に一気に農耕地が広がり、交通網が完成したわけである。

その一方で大量の自然資源の収奪も行なわれた。例えば木材伐採について見てみると、アイヌ文化時代は細い木を少し切る位で伐採量といえるものはなかった

それが明治五年頃には、三、四万立方メートル、明治四十年頃にはすでに三百五十万立方メートルにもなり、さらに最も多い戦争中の昭和十六年頃は千六百万立方メートルというふうに、伐採量が一気に拡大している。

野生動物の収奪もあった。そのひとつの例がシカである。明治六年の捕獲数は五万五千頭、八年は七万六千頭、十一年は七万頭というふうに、村田銃しかない時代に驚くべき乱獲が行なわれている。このことから、当時にかに多くのシカが生息していたかがわかる。しかしその後捕獲数は一挙に減って一時は絶滅したのもと思われるまでになった。オオカミとカワウソは実際にその頃絶滅した。

5、戦後の開発

昭和三十年代後半、産業構造を農業から工業へ再編成していこうとする池田内閣の所得倍増論により、新たに本格的な開発が始まった。全国総合開発政策に基づく工業基地開発と土木事業の波は北海道にも押し寄せてきた。しかし大規模な工業開発の試みは失敗に終り、北海道では主として公共投資による土木開発事業が行なわれた。そして、それらの多くは、地域社会の利便や防災対策の範囲を逸脱した単なる経済行為、すなわち「工事のための工事」であったために、大規模な

自然破壊が各地で起った。古くからせまい面積の中に多くの人口を抱えてきた日本列島では、豊かな自然が残されていたのは北海道と沖縄だけであるが、それらは戦後の乱開発によって壊滅的な打撃を受けている。その延長線上にあるのが、北海道では、千歳川放水路計画である。

6、近年のリゾート開発

本州における工業基地開発が限度に達し、多くの環境問題を引き起こす一方で、蓄積された過剰資金の新たな投資対象の開拓に迫られるようになったことから、国内対象の目玉として政府と財界はリゾート開発を計画した。昭和六十二年に成立したリゾート法はそのためのものである。これによってリゾート開発のための多くの利便が国家規模で用意され、リゾート開発ブームの堰が切られた。リゾート・ブームの特色の一つは、工業基地開発の時代には主要な対象にならなかった北海道が重要なターゲットになったことである。また、工業基地開発が主として沿岸地帯で行なわれたのに対して、リゾート開発は農山村地帯をねらって計画されている。しかし、税収の配分、基盤整備の地元負担等による地域収奪の構造では両者は全く共通の性格を持っている。



キタコブシ(モクレン科)

7、今後の課題

こうした状況の中で、北海道には今、貴重な価値を持つ自然の荒廃、稀少動物の減少のほか、水資源の枯渇、洪水、山崩れの多発、そしてゴルフ場等による新たな農薬汚染などが進んでいると言っており、本州は、北海道よりもはるかに開発が進んでいるとは言え、戦後に行なわれたものを除けば人間の開発行為は二千年の歳月をかけて、多くの英知を支えられて進められてきた。そのよい例が、治水や農地保全への配慮を織り混ぜた水田農業の確立である。しかし、北海道ではあまりにも急激な開発行為が、しかも自然への配慮や地域住民の生活とは無縁の形で押し進められてきたために大地全体にひずみが生じつつあるものと憂慮される。

先に述べたように、後水期の自然の特色は、水と土と植物の活性化とそれらの緊密な結びつきによって豊かな大地が作られたことである。そしてその恩恵をもっとも豊かに受けてきたのは温暖な気候と豊かな雨に恵まれた温帯であった。北海道もその一つである。しかし近年の北海道の状況は、急激な乱開発によって土と水と植物の連帯の絆が分断され、後水期がもともと抱えていた不安定な側面を引き出してしまったように見える。パン

ドラの函を開いてしまったように思われる。

環境問題に取り組む者の共通の課題は最水期の最大の恩恵たる土と水と植物の結びつきをもう一度、北海道に取り戻すことである。そのためには、第一に現在の乱開発を押し止めることが必要であり乱開発を生む社会のからくりを徹底的に目を向けなければならない。もう一つは、北海道の今後の在るべき姿として農林漁業などの一次産業の再興である。それは人間の手による土と水と植物の連帯の再構築によって大地を守る道であるとともに、資源の自給率を高めて日本の将来を救う道でもあると考える。

こうした視点から、自然保護、環境保全の運動は、地域住民によって、地域作りの立場から進められるべきものである。それは、地域の復権による、本道の民主社会建築の努力にもつながるものと考えられる。こうした地域住民の活動を支えるための重要な力は、活動する全道の住民の連帯である。北海道自然保護連合は、そのための組織として、大きな役割を背負っている。

春の小川はどこに

—北の森を守る全道集会から—

寺島 一男

盛況だった交流集会

三月一五日、札幌市民会館で「北の森を守る全道交流集会」が開かれた。北海道自然保護連合が主催したもので、道内各地からおよそ一〇〇名が参加した。北大苫小牧演習林長の石城謙吉氏の「森と川について」の記念講演の後、道内各地からの報告、そして参加者による情報交換や討論が行われた。

話題となった内容は、三つある。一つは改めて自然とは何か、自然保護とは何かという問い直し。二つめは、いま道内の自然環境破壊はどこまでできているのか。三つめは、破壊の進行に具体的にどう対処したらよいか、で



アズマイチゲ(スイカズラ科)



ある。

自然は自分たちの生命

自然ないし自然保護を問はず発言が、予想以上に多かった。「自然についていつも話題になるが、自分にとって都合のよい自然だけを考えていないか」「自然は知識的なものでないと思う。自然は自分たちの生命そのものではないか」「人間にとって野生動物とは何か。野生動物に対する理解が低いのではないか」「自分と生命はどういう関係にあるか」というところから出発することが大切だ」等々である。

今や自然とか自然保護ということばは、すっかり日常化している。十数年前を思うとまさに隔世の感だが、それだけに何をいまさらという向きもあると思う。しかし、逆に日常化した故の問い直しである。ことばの持つ意味が、共通の価値観を持つ程に熟さないまま氾濫しているだけに、現場では悩まされているのである。地域で同じ対象を見つめながら、価値観を共有していく努力が大切なのである。

連動する「汚染」と「破壊」

道内の自然環境破壊は、やはりかつてない深刻な状況にあることが、各地からの報告で明らかにされた。都市周辺では、ゴミや産業廃棄物の処理場が拡大の方向を示し、河川環境の悪化は山奥にまで及んでいる。パブルが

崩壊した現在も、ゴルフ場・スキー場・ホテルを中心とした相も変わらぬリゾートランドづくりが、生物相豊かな森林を次第に破壊している。ゴルフ場や畜産による河川の水質悪化も報告された。記念講演された石城氏は、水・土・空気等が壊される「汚染」と、森林・川・地表が壊される「破壊」が、連動して起こっていることに現在の危機と重大性があると指摘した。

仮に「汚染」を「化学的環境破壊」、「破壊」を「物理的環境破壊」とでも表現するならば、いまは「物理化学的環境破壊」が進行していることになる。「総破壊」の進行といってもよい。自然環境にとって、これ以上の質の悪い破壊はない。深刻さの所以である。

かつて「汚染」を象徴するものは「公害」であった。いまの風潮からすれば、公害は克服され過去のイメージとする感が強い。だがこの同時進行は、公害を何ら歴史的に整理・解決していないことを示している。

改正必要な環境アセス条例

今後、これらの事態にどう対処していくか。展望あるいくつかの取り組みも紹介されたが、開発の踊る現地では等しく深刻な悩みが語られた。深刻さを助長する原因の一つとして、道の環境アセスメント条例の問題点が指摘された。適用する対象面積が広すぎる。内容を環境保全の立場で。公聴会の意見は正確に審議に。審議内容はオープンに。……大滝サホロ、トマムの実例を目の当たりにした切

実で、現実的な要求である。全国に先駆けてつくられた北海道のアセス条例は、いま最も古くさい条例に化しつつある。抜本的な改正が、早急に必要である。

春の小川はどこに

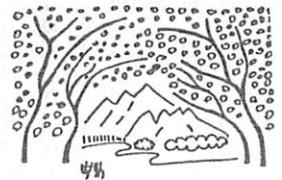
記念講演で石城氏は、最後に北海道の代表的な自然は「森と川」。しかし、春の小川はいまどこにあるのでしょうか、と述べられた。同感である。かつて日本の田舎ならどこでも見られた「さらさら行く」小川は、いつの間にか消え失せている。「岸のスマイレヤレンゲの花」もない。「世界の経済大国」と引換えにやはり大切なものを失ってきた。谷地(やち)と呼ばれたちよっとした湿地、名もない雑木林、春の小川など、ありふれた自然が「ありふれている」ために無造作に潰されてきた。「貴重な自然」は、無論貴重だ。だが、この貴重な自然は、圧倒的多くのありふれた自然の上に成り立っている。いま、その土台の自然が総崩れになろうとしているのだ。地球環境とともに、地域のごくありふれた自然に目を向けることの大切さも今問われているような気がする。北海道の自然環境の危機を克服する手だては、「地域社会の復権」と同じ軌道であるとした石城氏の指摘は、今後の自然保護運動にとって重要な方向性を示しているように思われた。



シラネアオイ
(キンポウゲ科)紫色の花

都市と農村の交流を 北海道自然保護連合に期待する

苫小牧自然保護協会
綱島 正人



バブル経済が崩壊し、あちらこちらでリゾートやゴルフ場建設の目論見が破産している。地域振興というお題目に名を借りた会員権制度の悪用や乱用の金儲けの企みが、露呈した。しかし、道内にはまだ多くのゴルフ場開発やリゾート開発計画がひしめいていることも事実である。リゾート開発には当然のごとく土地が必要であり、開発業者はありとあらゆる手段で土地を買いあさっている。列島改造計画の時代に土地を取得していた業者は別にしても、多くは現実には農業をしていたり林業をしている地権者から土地を買っているのである。

なぜこども簡単に土地を売るのであるか、という疑問が生じる。土地を売って儲けたい人が多すぎるのだろうか。しかし問題はそう単純ではない。

借金に苦しんでいる農業者や酪農者、後継者のいない高年令者、将来的にも希望を持っていない林業者、このように現在

生活に苦しんでいる人達が、まとまった土地を手ばなす最後の手段としてゴルフ場やリゾート開発業者に売っているのがある。この機会を逃すと土地を売ることさえ出来ないという。土地を売って濡れ手でアワの農民などは、ほんのひと握りにしかすぎないのである。土地を売って借金を返して、それでほとんどチャラなのである。みんな自分たちの土地を売りたいくないというのが、本当のところではないだろうか。土地を売るといふことは、自分たちの生活の場を失うことであり、自分の故郷を手放すことでもあるのだ。

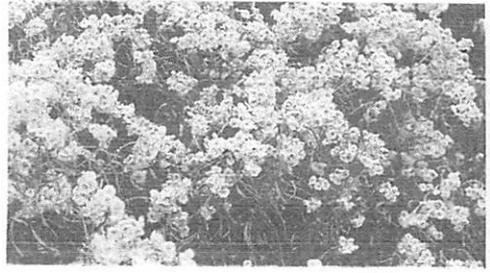
ここで、問題になることがある。それは行政であり、農民の利益を守るために存在している農協の事である。多くの農業者は農業政策に従い大型機械を導入し利益をあげるために、使いたくもない農薬を大量に使用している。そのあげく残ったものは膨大な借金や負債である。ゴ

ルフ場計画やリゾート計画が出ると、農協は借金の返済に土地を売ることが農民に指導したり、農協自ら開発計画に積極的に協力しているようなフシがある。それは多くの農地法違反の新聞記事が証言している。また土地の売買に同意しない農家に対しては、強要や脅し、あげくの果ては地域共同体の分断を行なっている。村八分である。共同作業を必要としている農家はやっていけない。こうしてしぶしぶ土地を手放されているのである。農業者には言いたくも言えない事情が多くあると聞く。

このような実体を目にしたとき私達には一体何ができるのだろうか。数千万の借金を肩代りすることも、後継者として農業を継ぐこともできない。また農協の横暴や不正を暴き、悪徳不動産業者や開発デベロッパーをうちのめす桜吹雪の遠山の金さんになれるわけではない。

私達にできることの一つは、その当事者である農業者と話し相手になることである。友達になることであって、決して彼らを孤立させないことである。

厚真町に住む本田弘さん。彼は、農業を営み自分の山を守り、手入れをしながらゴルフ場建設に反対をし、地元や苫小牧の自然保護にたずさわる人達のよき理解者でもある。また苫小牧東部開発反対運動に長く関わってきた経験をもつてい



ヤマハハコ(キク科)

る。本田さんと知り合ったおかげで、全く知らなかった農業問題や林業問題に関して生きた勉強をさせてもらった。本田さんの農場から健康な卵を買ったり、わずかつつであるが米、野菜などを購入させてもらっている。これらの交流が一步進んで、農作業の手伝いをする機会に恵まれた。素人が何もできるわけではないが、私と小学校一年の娘でもジャガイモの植え付けくらいは出来た。本田さんの家族が総出で一日半かかる作業でも、ずぶの素人の一五人も集まると、半日で終ってしまったのである。天候に左右される仕事だけに本田さんも非常に嬉しそうであった。当然、秋の収穫の一部を分けて頂く約束は成立した。

私達にとって年に一度か二度の農作業はレクリエーションの一つであるが、本田さんにとっては貴重な労働力の一部となった。作業が終わったのちには、みんなで焼き肉パーティーとなって大いに盛り上がった。

農村と都市、作物を作る側と消費する側。この関係に流れるのは貨幣だけであるはずはない。友情と信頼という人間と人間のコミニュケーションがある。

北海道自然保護連合もネットワークを利用して、各地域の中でこんなふうにお互い助けあうまた求めあう運動を進めたらどうだろうか。

「室蘭岳の自然を守る会」の活動をふりかえって

伴野美佐

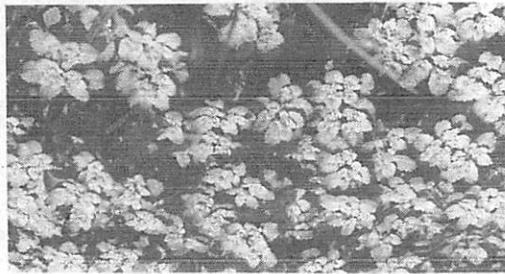


ふる里の山、室蘭岳は標高九一〇mの山容で、多くの人にハイキングコースとして親しまれ、緑少ない室蘭にあつて自然のシンボリック的存在です。室蘭の小中高の校歌にも多く歌われ、信条的にも市民に関わりの深い山です。かつてヒュッテまでの道は牧歌的な風情がありました。春には谷うつぎが桃色の花を咲かせ、秋には野いちごが、紅の実を結んだ草原に、今はアスファルトの駐車場と、人工的な遊具施設が鎮座しています。

この里山にスキー場が出来て、五年目を迎えました。守る会の根強い反対の第一期工事として、室蘭岳中腹の民有地に作ったものです。予定の第二期工事は水源涵養保安林を中腹から山頂にかけて伐採し、コースを整備しようというものです。この計画が一般に知らされた時はすでに議会で議決済み、各方面の根回しも終っていた状態でした。そんな中で山の緑に危機感を持った見ず知らずの人達

で、急ぎよ守る会を結成しました。最初の集まりの時、代表の「負け戦だけやるだけやってみよう」と、マイナスからの出発でした。お金もない権力も後盾もない、何から始めていいのか解らない、論議し行動し、悩み傷つき、支え合つて五年目を迎えました。

最初の一年間は、スキー場建設反対の署名集め、地区ごとの説明会、ピラマキ等を積極的に行ないました。また市や第三セクターの室蘭リゾート開発と、何度か公開討論会を行い、話し合いました。スキー場開発が室蘭市の活性化をもたらすという市側と、山の残りの少ない緑を子孫に残したいという、守る会との価値観の違いに、大きな隔たりが残ったままです。また市への対応ばかりでなく、林野庁へは、予想される保安林指定解除に對抗した、意義意見書を地元や地方の大勢の人達の協力を得て、集め続けました。更に長官宛に、「木を切らないで下さい



ネコノメソウ(ユキノシタ科)
黄色の花(頭部の葉も黄色い)



「。のハガキを送り続け、日本の中の小さな山、室蘭岳を印象付けました。守る会が市に全文公開を要求した環境影響調査書は、しぶしぶと要約版を見せてくれましたが、内容も紙の厚さも薄すっぱらなものでした。調査期間も冬季の五カ月のみ、肝心な積雪量も水増しされた生態系や植生などの調査も文献などを利用した物が多く、スキー場開発はさしたる影響は出ないだろうとの結論でした。市側はこの調査を十分な物であると、言い続けて来ましたが、昨年の秋に今までの事は白紙に戻し、守る会と合同の影響調査をしたいと、申し出てきました。理由は調査の要約版では、守る会の理解が得られない事と、話し合いの糸口が見えず、それを打開するためという、政治的配慮でした。この申し出に守る会としては、先に多額な費用と労力をかけた調査は、議会でもその結果を承認し、スキー場開発のゴーサインを出したのは何だったのかという、その責任と根拠のあいまいさを指摘しました。あくまで先の調査を全文公開するのが大前提であること、調査は、開発することによって得る物失う物を計り、計画の是非の判断材料になる等の見解を示し、開発のための方便の調査は同意出来ない旨を、文書で市側に伝えただけです。

私は守る会に入るまでは、全く何の運動にも関わったことがないただの主婦でした。ただ若い時から友達や子供ら一緒

に、汗を流して登った室蘭岳を、そっとしておきたい、その想いで連らなってきました。入会した当初は、外部からいわれのない中傷や、人の態度の様変りに、涙にくれた事もありましたけれど、その

住民運動は育ち合いの会

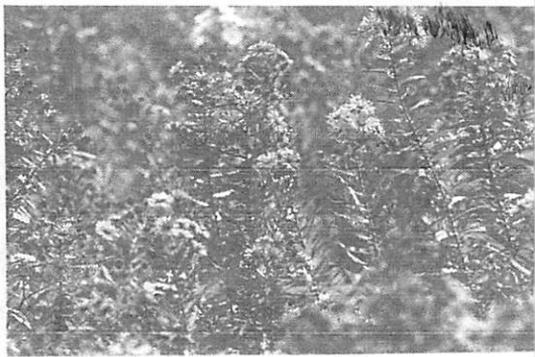
ユウパリコザクラの会活動報告

水尾 君尾

体験以上に、多くの人達に出会い、刺激され、力づけられ得たい体験をしました。本当にこの五年間は、人間勉強、社会勉強と思いい、ここの二年は楽しみながら連なっています。

緊急を要する登山道の整備について、今私達はスライド行脚を行なっている。近年の登山者急増によるオーバーユース問題にも直面しており、行政の重い腰を動かすのには、夕張岳の現状の認識を新たにしてもらい、夕張岳保全の窓口の一本化と、官民による合同登山を果たすために。昭和三十年、道立自然公園に指定されてからも保全面では全く手がつけられていず、保護監視は夕張山岳会員に頼り、夕張岳に一人、シューパロ湖周辺に一人の配置で、今日まで登山者のモラルによって守られてきた山でもある。市民体育祭山開き登山を教育委員会が主催し、重ねて二十九回目を昨年迎えた。毎年山には登るが、その登山道の整備に関して、何も提言をせずに来ている教育委員会の姿勢は、「財政難」を表向きの理

由に上げているが、根本には「国有地なのだから市は手を出さなくてよい」という考えがあるようで、これは自然保護を司らない責任の逃避があるように思う。夕張岳の未来を描くために、教育長と話し合う度に、労力と知恵を出し合い「登山道の整備は官民一体で」と提案をしてきている。その他関係する社会体育振興課自然保護担当の地域開発課、空知支庁自然保護課の窓口になっている農林課、夕張岳登山を宣伝している観光協会の事務局を持つ観光事業課へも足を運びスライド出前を試みた。社会教育面から教育委員長、教育委員、又、市職員厚生文京委員へもそれぞれスライド会を行ない、湿原のぬかるみや裸地の荒廃が急速に進んでいる状況を視覚に訴えながら、夕張営林署、空地支庁自然保護課へスライド訪

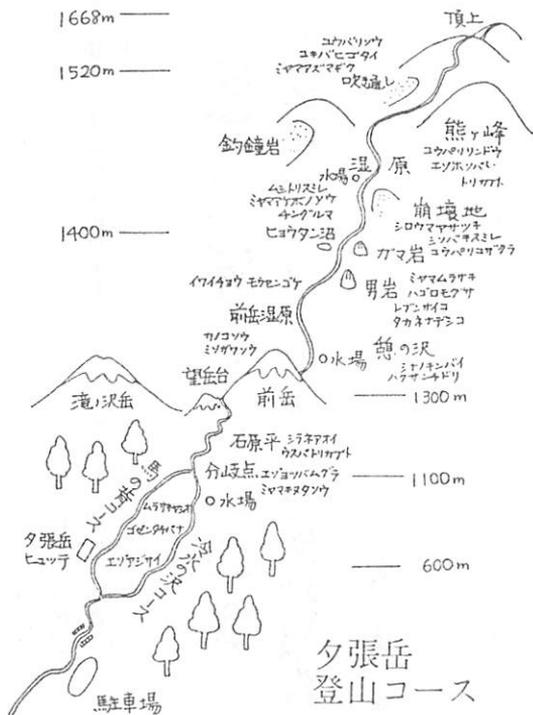


エゾノコンギク(キク科)
うす紫の花

問をした際の対応と市民の熱意を伝え歩いている。「夕張岳の開発休止」発言を経て、道教委文化課、道環境科学センターの調査等の大きな進展があり、ようやく役所の中ではこの程度の話し合いができるようになってきた。振り返ってみると炭都夕張は最後に残された三菱炭鉱の閉山を予測し、苦境に立たされるまちでのスキー場開発計画は、地域活性化を大義名分にバラ色の夢として描がれていた。観光行政に異を唱える事も夕張岳について語るのも「タブー視」されている市議会に、地区労はじめ、商工会議所、農民協議会、南部連合町内会等、市内を網羅する組織が開発推進の要望書を出すのである。市民組織作りはいわば四面楚歌の中で、ユウバリコザクラの会を産む苦しみからの始まりがあった。行政とあつれきを作らない、まちを二分しない願いは「人間が大事か、花が大事か」と二者択一の問いかけに悩み揺れ動きながら、自然を守ること、地域活性化の両面を考えることで、今までになかった自然保護運動の斬新な形態と、重ねて夕張の皮膚感覚を大切にしてきた。閉山の切迫する危機感がまちを覆い、閉山までの残された時間との戦いは「あすの夕張と自然を考えるシンポジウム」を取り組んだ。シンポジウムの成否は会の命運を賭けるものであったから、団結したエネルギーはしなやかにしたたかに燃えて住民運動のうねりを起こし、市内外へと大きな反響を

呼ぶのだった。この画期的なシンポジウムの開催は、夕張市史に記載されるものとなった。革新であり、保守的な組織のまちで、自主的な市民レベルの会は育たないというジंकウスがまだまだ生きており、このジंकウスを越えうる活動は情報のネットワークづくり、会の裾野を広げる対話、代案作り等々、途方もなく奥深いものであったから、自らの知識や力不足を嘆きつつ、紆余曲折と暗中模索の連続であった。それでも、たじろぎながらも活動のよりどころを作ったのは、同じく自然を愛する他団体や各個人の方々そして、地質、動植物、昆虫、林学等の各分野の専門家の方々

い、活動を通して暖かい交流の絆を深めてくれたからにほかならない。これは小さな会の大きな財産になっている。会が発足して三年間の活動は、思いと行動をバネに、実に多様な体験を共有し合ってきている。まさに「やるっきゃない」の一念は、ただの母さんたちでさえ主婦のネットワークを馳せ、共有の体験から育ち合ってきた確かさを実感できている。行政側の人と膝をつき合わせられるようになってきた事も、意識育ちが緒につき始めたと思いたい。ふるさとの大地に、夕張岳と生活が結ばれている意識がより高められるような住民運動を、これからも連帯していきたいと思う。



〈夕張岳は誰のものから〉

各地から

このコーナーに原稿を
お寄せ下さい。
(600字程度)

行ってよかった

北大農場で開かれた

「雪の観察会」

杉浦 功悦

二月二日、雪の観察会に参加しました。観察会は雪がしんと降り続く中、夏は牧草地となるだっぴろい木もない場所で行なわれました。雪の観察会が開かれるのは初めてだそうで、最初はこんな場所であったら何ができるのだろうかという疑問が湧きました。参加して本当に面白い観察会でした。

観察会は雪の降り積もった断面をシャベルで切り出し、その層構造を観察すること、また層の部分によって雪の結晶が異なっていることをルーペで観察すること、及び雪を皆で踏み固め、鋸とシャベルで雪のブロックを切り出し、イグルーを作ること等が主な内容でしたが、どれ一つとっても、素朴な感動や、先人の知恵のすばらしさを味わうことができました。観察会は子供から年配の方までいろいろな人が参加しましたが特に子供達の生き生きとした顔が印象的でした。

昨今、子供の冬の遊びと言えば、お

金のかかる道具に偏重し過ぎたゲレンデスキーやスケート、あるいはファミコンなど屋内で小人数で遊ぶことくらいしか、頭に浮かびませんでしたが、子供たちがイグルーを作る時のうれしそうなお顔を見ていたらどうかという観察会が今までなかったのかと不思議に思えました。来年またこのような観察会が開かれることを切に望みます。



イグルー作り

八ヶ岳からの お便り

原 伊市

北の自然四九号拝受、一読してゴルフ場ラッシュ乱開発の状況に驚きを新たにしました。「国(企業)栄えて山河なし」の状況です。苦小牧の方が長良川河口堰反対にわざわざ参加されたとのこと、みんなが手をつなぐことは貴いことです。

私は九一年八月、平取の山道康子さんの呼び掛けで、アイヌ一万年祭に参加し、帰りに砂流川ダムの工事現場を見ました。苦東工業基地計画は解消したというのにダム工事は進められている。帰ってから横路知事と開発庁長官にストップ要請の葉書を出しました。砂流川ダムはアイヌの残された水田を湖底にしてしまうそうです。

ここ長野では、オリンピックの自然破壊が憂慮されています。これも資本の貪欲のいけにえであります。八ヶ岳西麓の私の部落の財産区ではゴルフ場計画に対し反対しているのは、一六四人中私を含めた三人で、市長を告発したのは、私だけです。一応ストップ。婦人会の反対署名五五〇〇人がバックアップの形になっています。聞わなくて勝利はない。皆様のご健闘を！

ゴルフ場&放水路 を考えよう

平井百合子

四月十二日(日)千歳市市民文化センターにおいて、「馬追丘陵のゴルフ場と千歳川放水路を考える集い」を、

千歳環境問題連絡会の主催で行ないました。第一部は小野有五北大教授のスライド上映と講演で、地域の自然の価値の高さと、ゴルフ場と放水路双方の破壊のすごさが氏の説得力ある理論と映像により示されました。第二部は環

境問題に詳しい弁護士市川守弘氏の司会で、フォーラムを行ないました。まず放水路についてウトナイ湖バードサンクチュアリーの大畑孝二氏から報告、続いて私のほうから、ゴルフ場計画集中地域の馬追丘陵と放水路との地元千歳での関係について説明し、さらに長沼町でゴルフ場反対運動を行なっている山田美智子さんから地域の実情などが紹介されました。そして、会場いっぱいとなった八十名余りの参加者とともに問題を考えてみました。発言者は、前回までよりも、農家の方々が多く、発言自体も大変活発になってきたことが感じられました。

放水路については、私達の地域千歳は、受益地区となっていて、開発促進と決めつけられています。ほとんど市民は実際に洪水被害を受けている農家でさえ、無関心が目立ち、まともな論議もされていません。また逆に計画を疑問視している人もいます。ここではっきりと確認し合ったのは「馬追丘陵の森林をゴルフ場などで破壊すれば、洪水はますますひどくなる。放水路を考える前に、治山を考え洪水の防止に努力を払うべきだ。森林の価値を見直す」ということです。

近々横路知事は、放水路容認という立場を明らかにするそうですが、「ゴルフ場を乱立させるには、放水路は必要」という結論を得たのではないかと心配です。いずれにせよ地元での論議はこれからのので、結論は先送りすべきです。

今、北海道には、129件ものリゾート開発構想があります。

道内リゾート開発構想一覧(道庁調べ)

市 町 村 構 想 名	市 町 村 名	構想の状況
富良野・大雪リゾート地域整備構想(旭岳地区)	東川町	実施中
同(ジャパンヘルシーゾーン地区)	美瑛町	実施中
同 上	上富良野町	計画策定済
同(北星丘陵リゾート地区)	中富良野市	計画策定済
同(ふらの地区)	南富良野町	実施中
同(かなやま湖地区・トマム地区)	占冠村	実施中
同(トマム地区)	日高町	実施中
同(日高地区)	新得町	実施中
同(サホロ地区)	函館市	実施中
函館・大沼リゾート地域整備推進構想(Aゾーン:函館・戸井地区)	上大磯町	実施中
同(Fゾーン:上磯・大野地区)	大七飯町	実施中
同 上	七戸町	実施中
同(Bゾーン:大沼・駒ヶ岳地区、Cゾーン:東大沼地区、Dゾーン:七飯・森地区)	恵山町	実施中
同(Aゾーン:函館・戸井地区)	椴法華村	実施中
(Gゾーン:恵山・椴法華地区)	同 上	実施中
同(Hゾーン:南茅部地区)	鹿部町	実施中
同(Cゾーン:東大沼地区、Eゾーン:鹿部・砂原地区)	砂原町	実施中
同(Eゾーン:鹿部・砂原地区)	森町	実施中
同(Bゾーン:大沼・駒ヶ岳地区、Dゾーン:七飯・森地区)	蘭越町	計画策定済
蘭越町総合リゾート開発	蘭越町	構想段階
サールフェルデンの丘構想	蘭越町	構想段階
蘭越町吉園地区開発	蘭越町	構想段階
リゾートフォレストライデン	ニセコ町	実施中
ニセコ東山開発	セコ町	計画策定済
ノーザングランプリ真狩	真狩村	計画策定済
レイトンヒルズ羊蹄山コース	留寿都村	実施中
ルスツリゾート観光開発事業	喜茂別町	実施中
喜茂別ゴルフコース造成事業	プロミネンス喜茂別リゾート	計画策定済
プロミネンス喜茂別リゾート	喜茂別町	構想段階
セザールカントリー羊蹄開発	喜茂別町	構想段階
中岳リゾート開発	京極町	構想段階
ニセコ高原リゾート開発計画	俱知安町	実施中
Wis地区リゾート開発構想	和安町	構想段階
いわないマリン・タウン・プロジェクト・円山地区観光開発	共岩内町	構想段階
赤井川森林リゾート開発事業	赤井川村	実施中
有珠湾リゾート開発計画	伊達市	構想段階
エイベックスリゾート洞爺	豊浦町	実施中
エイベックスリゾート洞爺	虻田町	実施中
グリーンスティ洞爺湖	虻田町	実施中
理想人・イン・洞爺	洞爺村	構想段階
早月高原レジャーランド	洞爺村	構想段階
フォレスト276総合開発	大滝村	実施中
大滝高原森林空間総合利用整備事業	大滝村	計画策定済
仲洞爺リゾート	大壮瞥町	構想段階
星の降る里カディアンワールド整備事業	芦別町	実施中
エルム高原リゾート開発構想	赤平市	実施中
桂沢開発	三笠市	構想段階
滝川リバーサイドパーク構想	滝川市	実施中
丸加高原リゾート開発構想	滝川市	実施中
砂川オアシスパーク構想	砂川市	実施中
道立子どもの国整備	砂川市	実施中
トレーニングキャンプ歌志内市スイスランド計画	歌志内市	実施中
スプリングパークないえ構想	奈井江町	実施中
クリスタルタウン構想	上砂川町	構想段階
レースイ地区リゾート	夕張市	実施中
夕張滝の上公園開発計画	夕張市	実施中
オホーツク・アカデミア構想	網走市	実施中
のとや岬ナチュラルパーク構想	網走市	構想段階
東藻琴村リゾート開発構想	藻琴村	構想段階
生きがいの村構想	藻琴村	構想段階
美幌カントリー倶楽部開発計画	美幌町	計画策定済
津別町リゾート開発構想	津別町	実施中
海別岳山麓開発計画	斜里町	構想段階

清里町リゾート開発構想	別町	構想段階
小清水町リフレッシュリゾート	津別町	実施中
サロマ湖観光開発計画	呂別町	計画策定済
常呂環状観光ルート整備構想	常呂別町	構想段階
湧別町観光開発構想	湧別町	構想段階
石狩シーサイドパーク開発	石狩別町	実施中
八の沢ふれあいの森整備	石狩別町	構想段階
リバーサイドパーク整備	石狩別町	構想段階
青山高原リゾートゾーン	当別町	計画策定済
シーサイドリゾート建設計画	厚田村	構想段階
クローズアップはまます整備	浜田村	実施中
道民の森の整備	当月別町	実施中
同上	月形町	実施中
ふるさと総合公園整備事業	浦臼町	実施中
ウラウスリゾート開発事業	新十津川町	実施中
いきいきかんとりい新十津川構想	新十津川町	実施中
暑寒山麓高原リゾート地域整備事業	雨竜町	構想段階
サンフラワーパーク構想	北竜町	実施中
スコレパークほろしん整備構想	沼田町	実施中
ゴールデン・ビーチ・リゾート整備構想	留萌市	実施中
リバーサイドスポーツエリア整備事業	増毛町	実施中
小平しべ湖グリーンビレッジの整備	小平町	構想段階
北海道ノーザンワールド計画	小島町	計画策定済
北海道中世の丘整備構想	上ノ国町	実施中
グローイング・アップくまいし構想	釧路町	計画策定済
瀬棚港マリンタウンプロジェクト	瀬棚町	実施中
美利河ダム周辺地域整備構想	今金町	実施中
ブナ北限の里づくり構想	黒松内町	実施中
フルティー&スポーツリゾート総合計画	木沼町	構想段階
マオイゴルフリゾート	長沼町	実施中
馬追丘陵リゾート	由仁町	構想段階
旭川カムイリゾート構想	旭川市	計画策定済
健康の森構想	名寄市	構想段階
道立自然公園、国民休養地の整備構想	浜頓別町	実施中
うたのぼり健康回復村拡充構想	歌登町	実施中
温泉地区リゾート開発構想	豊富町	実施中
利尻富士町ふれあいランド整備事業	利尻富士町	実施中
北見スポーツピア構想	北見市	実施中
端野町リゾート開発構想	端野町	実施中
スキー文化村建設事業等推進計画	白滝村	実施中
室蘭ボルカノベイ・マリッジャー構想	室蘭市	実施中
オートリゾート樽前(錦大沼公園)	小牧市	実施中
臨森林型国際リゾート計画	小牧市	実施中
ル・ベタウゴルフ&リゾート開発	追分町	実施中
フォーラムパーク厚真	厚真町	構想段階
二風谷レイクサイドパーク構想	平取町	実施中
新冠町リゾート開発事業	新冠町	構想段階
三石海浜公園構想	三石町	実施中
百人浜リゾートパーク整備事業	えりも町	実施中
ポロシリ農村リゾートパーク	帯広市	構想段階
中札内フェリーエンドルフ(農村休暇村)計画	札内村	計画策定済
更別村カントリーパーク&モーターパーク	更別村	実施中
忠類村観光開発基本構想	忠類村	実施中
広尾町コースタル・コミュニティ・ゾーン	広尾町	実施中
高原ヴィレッジの森・本別	本別町	計画策定済
十勝リゾート計画	白糠町	構想段階
(仮称)くすりゴルフ倶楽部造成事業	白糠町	実施中
レイトン・スペース	阿寒町	計画策定済
遼古武しあわせの園開発計画	剣路町	構想段階
ファンタジック・リゾート!ふれあいの里おんべつ構想	音別町	構想段階
島牧村観光開発基本構想	島牧村	実施中
鹿ノ子ダム周辺環境整備事業第2次計画	置戸町	実施中
八方台野外活動施設整備事業	留邊蘂町	実施中
士幌高原リゾート開発構想	士幌町	実施中

環境アクセスメントと 審議会に関するその 後の動き

編集部

前号の「北の自然」で詳しく紹介した大滝村のリゾート計画のアクセスは、公聴会での意見は審議会の審議に反映されず、また審議過程も小委員会が非公開のためわからぬまま、ご他聞にもせず、そのまま通過してしまった。一方、サホロリゾートの方は知事が修正意見書を出し計画の見直しを求めた。このような修正はリゾート開発関係のアクセスでは初めてのことだそうだし、計画地を尾根をはさんだ反対側に変更することにはなったが、位置を変えても問題は多く、問題解決にはなっていない。

それはともかくとして、今回のトマムリゾートを含めた三ヶ所のアセスは我々にあらためてアクセスメント制度の様々な矛盾点を意識せしめた。そこで四月一八日に道庁においてアクセスメントの問題点を明らかにして道の考え方を知らうと、連合主催で意見交換会を開くことになった。出席者は道側は環境調整課長以下四名。こちらは連合加盟団体六団体とサホロ・大滝の地元団体他で計十七人。土曜日の午後という

ことで一時間半しかとれず、十分な話し合いにはならなかったが、時間が無いのはあらかじめ承知していたので、具体的な指摘を要領よくするように努めた。こちら側の意見は、アクセスの対象面積を引き下げる、評価書に調査期間や調査者名及び手法を明示する、工事着工後も監視し環境調査を続ける、アクセスメント法を作るよう国に働きかける、住民参加の範囲を広げる、公聴会の住民の意見を審議に反映させる、審議会の小委員会を公開にする、審議委員の人選方法を民主的にする、調査、評価を事業者でなく第三者が行なう、貴重な自然だけでなく、ありふれた自然も対象にする、準備書の縦覧は誰もが情報にキャッチでき簡単に見られるよう配慮する、アクセスの対象とされている計画を事前に公表してほしい、などである。

「道民との対話」をかかげた道政でありながら、これまで今回のような機会はなかったように思う。これを機に一層積極的に対話を求めていきたい。今回は道環境影響評価条例の改正が話の中心になったが、この件については今後さらに要望を聴取した上で、改正点を整理したらどうか。そして、道議会に所定の手続きによってこれを求めていく必要があると思う。同じ様な問題意識を持っている団体が、時期をそろえてそれぞれに議会にこうした行動をとるのが効果的と思われる。また、環境アクセスが計画の評価では

なくあくまでも環境の評価に限ってりとされているため、計画断念の可能性を求める住民の意見はほとんど無視されているのが現実である。一方、アクセス以外の個別法で許認可制度をとっているものは、できるだけ住民参加を広げるように、併せてこれらの運動を進めていけたらいいと思う。

審議会・公聴会の民主化問題については、五月二三日付の北海道新聞でしっかりと取り上げられて、世論形成へと大きく前進した。

また数日後、同紙で、公害対策審議会の小委員会である水源保全部会を非公開とし、公開を求める道民の要請を破棄した事が報道され、小委員会の秘密性は広く道民の知るところとなった。この水源保全部会はゴルフ場開発に関する道の指導要綱ができてから、水道水源に関わるゴルフ場開発事業の審査を主に行なってきた。審議委員の一部委員に外部からの専門委員を加えた十人で構成され、審査はアクセスの審議会も同じであるがほとんど小委員会に一任されており、審査結果を審議会に報告し審議会の答申として知事に提出される仕組みとなっている。したがって肝心の小委員会が非公開であるという事は、議会が非公開になるのと同じ位に重大な問題である。

今、次々と木が切られ山が崩されていく現実がある。それに心を痛めてい

る人たちが「これだけ自然が大事といわれながらもなぜ開発は止まらないのか？」という言葉をよく聞くが、この稿で指摘した問題点が一つ一つ改善されたら、これらの「止まらない」悩みもかなり減り、地球のためにも大いに役立つはずである。

参加しよう！

＝リゾートを考える全道交流集会＝

7月11日・12日 新得町(公民館中ホール)

主催：サホロリゾート開発問題協議会

北海道自然保護連合

(社)北海道自然保護協会

連絡先：01566-4-6893 (芳賀)

1992年度 総会報告

代表者会議（1992年度総会）を、3月14日午後5時～8時、札幌市のクリスチャンセンターにおいて開きました。また、当日の残りの議題は4月18日に再度代表者会議を開いて決めました（かでの27において、午後3時～5時）。以下は両日の報告です。

- ▲出席団体～ *大雪と石狩の自然を守る会
3月/稲田、寺島 4月/同左 *北海道自然保護協会 3月/柳沢 4月/中野 *ユウバリコザクラの会 3月/内田 *道央地区勤労者山岳連盟 3月/小山、室岡、山本 *十勝自然保護協会 3月/野州 *然別湖の自然を考える会 3月/崎野 *キツネハウス 3月/平井 4月/平井、小久保 *北海道の自然を考える会 3月/前田 4月/同 *東藻琴の自然を考える会 3月/小田島 *室蘭岳の自然を守る会 3月/三浦、岸田、二井田 4月/二井田、伴野、
- ▲91年度活動報告～ *要望書提出（ゴルフ場開発事業の凍結、北海道特定開発行為審査会及

北海道森林審査会の人員構成、千歳市周辺のゴルフ場計画の凍結についての要望書） *第8回日高自然セミナー *森林生態系保護地域の指定委員会に連合から1名と各地元の保護団体から1名の参加が実現 *「千歳川放水路を考える」講演会を協賛し参加する。

▲92年度活動計画～ *事務局体制の確立 *加盟団体・賛助会員の拡大と対応 *会報「北の自然」の発行 *事務局主催による講演会などを1～2回開催 *加盟団体の行事の支援 *その他、エゾシカの食肉化事業中止の要望書を出すことに決定。

▲役員改選～ *代表は稲田、副代表・事務局長は未定、常務委員はこれまでと同様の8団体に苫小牧自然保護協会が加わった。 *事務局は、これまでの札幌一極集中から多極分散へ変えることが決まった。二井田（企画、連絡）～室蘭、寺島（文書作成）～旭川、平井（会報）～千歳、札幌の常務委員が会計他を担当。

▲会計報告～ 4月の会議で下記の決算及予算が了承された。

北海道自然保護連合91年度決算報告（92.3.14）

収入	予算	決算	支出	
団体加盟費	150,000	80,000	事務所家賃	120,000
賛助会費	1,100,000	624,000	光熱費	14,944
寄付金	300,000	74,380	コピーリース	40,500
広告代	30,000	0	消耗品代	52,687
事業収入	30,000	3,480	会報印刷代	181,280
			会報発送費	51,532
	1,610,000	781,860	通信費	108,288
			会議費	16,750
			人件費	100,000
				685,981

92年度予算

収入	支出
団体加盟費	100,000
賛助会費	600,000
寄付金	50,000
広告代	30,000
事業収入	10,000
	790,000
予備費	25,000
未収金	100,000
*テレホンカード未払50枚=50,000	
	912,669



〈ベニバナイチヤクソウ〉

野の花の写真コーナーいかがでしたか？皆様も、自然をモチーフにした写真やイラスト作品をどしどしお寄せ下さい。

賛助会員の皆様へ92年度賛助会費納入をよろしくお願いたします。

編集後記

北海道は今、まばゆいほどに緑鮮やかな新緑の季節です。

本号でこの北の自然はめでたく50号を迎えました。一つの目的に向かいただひたすらつづり続けた50号の重みをかみしめつつ編集したつもりです。

「北の森を守る全道交流会集会」では、石城先生にお世話になりました。掲載させていただいた講演記録は、今後の私たちの活動の道しるべとなることでしょう。

そろそろまた秋にやる交流集会の構想を持ちたいと思います。賛助会員手作りのイベントなどがあってもいいのではないかと思います。アイディアがあればお願いします。

ブラジルで地球サミットが開かれています。関山昭子さん(1頁)の作詞による「マンドート」という歌が現地で歌われたそうです。これからもいい歌をたくさんつくって自然を守る人を励まして下さい。

では、皆さんとりあえず、新得町の集いでお目にかかりましょう。マンドート！

北の自然

No.50
1992. 6

1992年6月26日発行

発行 北海道自然保護連合

発行人 稲田 孝治

編集人 平井 百合子

「北の自然」連絡先 〒066千歳郵便局私書箱14号

Tel・Fax 0123-29-2433

賛助会費 年間3,000円

郵便振替口座 小樽1-4071

北海道自然保護連合連絡先

室蘭市輪西町2丁目7-9二井田高敏方

Tel 0143-44-4823

Fax 0143-44-4831

印刷所 (株)北海道機関紙印刷所

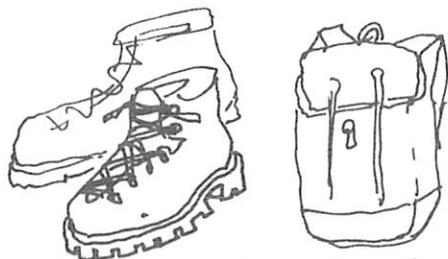
お知らせ

◎しばらく、事務局の電話がつながりにくく一部の方にたいへんご迷惑をかけてまいりましたが、今後は室蘭の二井田さんの所が連合の連絡先となりますのでよろしくお願いいたします。

◎前号のゴルフ場開発計画一覧表で次の誤りがありましたのでお詫びし訂正いたします。

NO. 21、22、58～62、64について

適用(誤)→除外(正)



登山
キャンプ
カヌー
アウトドア用品

北海道、山の店 秀岳荘

営業時間/AM10:00~PM7:00 定休日/毎週月曜日

札幌本店 札幌市北区北12条西3丁目 ☎(011)726-1235

旭川店 旭川市7条8丁目左2号 ☎(0166)23-3416

(専用駐車場完備)